

表紙制作者

熊本県立第二高校
3年生
矢野世怜那さん



高校生との対話で描く

私たちの学校
これからの学校



聞き手

VIEW21 編集部
統括責任者
柏木 崇

1998年4月号から生徒と教師の写真で飾られてきた本誌表紙。2020年6月号からは、臨時休業という想定外の状況下で、学校での学びの価値を捉え直した生徒のアート作品の力を借りて、引き続き、生徒と教師の関係を描きます。

矢野さんは、今回の表紙に掲載した作品以外にも、写真と絵を融合させたものなど、様々な手法で作品を制作してくれた。下は、矢野さんが第二高校の教師に意見をもらうために提出した制作途中のもの。



矢野さんが通う熊本県立第二高校の取り組みを、今号の特集 (P.16 ~ 20) で紹介しています。

学校で他者のよさを見つけながら、人と人がつながっていく

柏木 今回の絵を描いた時の状況を教えてください。

矢野 この絵を描いたのは5月下旬の臨時休業中で、参加する予定だった美術コンクールが開催されず、新たな目標を探していた時でした。さらに、運動会も中止になり、応援団席に掲げる巨大な団画を制作する機会もなくなりました。美術科の3年生として悔しい思いをしていたところだったので、自分の力を外部に発信できるチャンスをいただけてうれしかったです。

柏木 表紙の絵として選んだ作品以外にも、候補として何点か描いてくれたんですね。

矢野 はい。どの作品でも、先生と生徒の関係の近さを表現しました。私が第二高校に入学して驚いたのは、職員室にいつもたくさんの生徒がいて、先生と話をしていることでした。臨時休業期間を通じて、先生とのコミュニケーションの大切さを改めて感じたので、先生と生徒のつながりを絵で表現したいと思ったんです。

柏木 先生はとても身近な存在なんですね。

矢野 勉強のことも進路のことも相談しやすいです。この絵についても、先生方からいろいろな意見をいただきました。校長先生にもアドバイスをいただいたんですよ。

柏木 美術科の先生だけではなく、校長先生にもですか！いろいろな人から意見をもらうことで、混乱することはないのでですか。

矢野 美術では、意外な部分が評価されたり、指摘を受けたりすることがよくあります。そして、試行錯誤を重ねた作品が「強い作品」として評価されるんです。確かに、以前は指摘を受ける中で、自分を否定されているような気持ちになったこともありました。でも今は、他者の意見に対して、「自分の知らない魅力を引き出そうとしてくれる」と思えるようになりました。

柏木 自分では気づいていない魅力を他者が見つけてくれる……それってまさに、人間関係の礎として必要なものかもしれません。

矢野 作品に対する批評をそのように受け止められるようになってからは、人間関係でも相手のよいところにまず目が向くようになったんです。よいところをたくさん見つけて、すぐにそれを相手に伝えてあげようという気持ちで、他者と向き合えるようになりました。

柏木 そうした他者のよいところを見つけようという気持ちは、矢野さんが絵で伝えようとした、第二高校における先生と生徒のコミュニケーションにも通じるものかもしれませんね。第二高校の職員室の様子を、矢野さんと一緒に鑑賞してみたいなと思いました！ありがとうございました。